

# おきなぐさ

みやざわ けんじ  
宮沢 賢治

うずのしゅげを知っていますか。

うずのしゅげは、植物学ではおきなぐさと呼ばれますがおきなぐさという名はなんだかあの優しい若い花を表さないように思います。

そんならうずのしゅげとは何のことかといわれても私にはわかったようなまたわからないような気がします。

それは例えば私どものほうでねこやなぎの花芽をべむべるといいますがそのべむべろがなんのことかわかったようなわからないような気がするのと全く同じです。とにかくべむべろという語の響きの中にあの柳の花芽の銀びろうどの心持ち、滑らかな春の初めの光のぐあいが実ははっきり出ているように、うずのしゅげというときはあの毛茛科のおきなぐさの黒繻子の花びら、青白いやはり銀びろうどの刻みのある葉、それから六月のつやつや光る冠毛がみなはっきりと目に浮かびます。

真っ赤なアネモネの花の従兄、きみかげそうやかたくりの花の友達、このうずのしゅげの花を嫌いなものはありません。

ご覧なさい。この花は黒繻子でもこしらえた変わり型のコップのように見えますが、その黒いのは例えば葡萄酒が黒く見えると同じです。この花の下を始終行ったり来たりする蟻に私は尋ねます。

「おまえはうずのしゅげは好きかい、嫌いかい。」

蟻は活発に答えます。

「大好きです。誰だってあの人を嫌いなものはありません。」

「けれどもあの花は真っ黒だよ。」

「いいえ、黒く見えるときもそれはあります。けれどもまるで燃えあがって真っ赤なときもあります。」

「はてな、おまえたちの目にはそんなぐあいに見えるのかい。」

「いいえ、お日さまの光の降るときなら誰にだって真っ赤に見えるだろうと思います。」

「そうそう。もうわかったよ。おまえたちはいつでも花を透かして見るのだから。」

「そしてあの葉や茎だって立派でしょう。柔らかな銀の糸が植えてあるようでしょう。私たちの仲間では誰かが病気にかかったときはあの糸をほんのすこしもらってきて静かに体をさすってやります。」

「そうかい。それで、結局おまえたちはうずのしゅげは大好きなんだろう。」

「そうです。」

「よろしい。さよなら。気をつけておいで。」

この通りです。

また向こうの、黒いひのきの森の中の空き地に山男がいます。山男はお日さまに向いて倒れた木に腰掛けて何か鳥を引き裂いて食べようとしているらしいのですがなぜあの黝んだ黄金の目

【おきなぐさ】草の名前。日当たりのよい山野に生える。白い毛が密生しており、おきな、つまり老人の白髪を連想させるところから、「おきなぐさ」の名がついた。

1 【うずのしゅげ】おきなぐさの別名。

6 【ねこやなぎ】落葉低木の一種。春、葉が出る前に、柔らかな銀色の毛に包まれた花をつける。

8 【びろうど】艶があって滑らかな布。

9 【毛茛科】植物の分類の一つ。

9 【繻子】艶のある織物の一種。

12 【きみかげそう】スズランの別名。

12 【かたくり】花の名前。「かたかこ」とも呼ばれる。

13 【すこし】少し。

20 【黝む】黒っぽくなる。

玉を地面にじっと向けているのでしよう。鳥を食べることさえ忘れたようです。

あれは空き地の枯れ草の中に一本のうずのしゅげが花をつけ風にかすかに揺れているのを見ているからです。

私は去年のちょうど今頃の風の透きとおったある日の昼間を思い出します。

それは小岩井農場の南、あのゆるやかな七つ森のいちばん西の外れの西側でした。枯れ草の中に二本のうずのしゅげがもうその黒い柔らかな花をつけていました。

まばゆい白い雲が小さな小さなきれになって碎けて乱れて空をいっぱい東の方へどんどんどんどん飛びました。

お日さまは何べんも雲に隠されて銀の鏡のように白く光ったりまた輝いて大きな宝石のように青空の淵にかかったりしました。

山脈の雪は真っ白に燃え、目の前の野原は黄色や茶の縞になってあちこち掘り起こされた畑は鶯色の四角なきれをあてたように見えたりしました。

おきなぐさはその変幻の光の奇術の中で夢よりも静かに話しました。

「ねえ、雲がまたお日さんにかかるよ。そら向こうの畑がもう陰になった。」

「走って来る、早いねえ、もうから松も暗くなった。もう越えた。」

「来た、来た。おお暗い。急に辺りが青くしんとなった。」

「うん、だけでもう雲が半分お日さんの下をぐぐってしまったよ。すぐ明るくなるんだよ。」

「もう出る。そら、ああ明るくなった。」

「だめだい。また来るよ、そら、ね、もう向こうのポプラの木が黒くなったろう。」

「うん。まるでまわり燈籠のようだねえ。」

「おい、ご覧。山の雪の上でも雲の影が滑ってるよ。あすこ。そら。ここよりも動きようが遅いねえ。」

「もう下りてくる。ああ今度は早い早い、まるで落ちてくるようだ。もう麓まで来ちゃった。おや、どこへ行ったんだろう、見えなくなっちゃった。」

「不思議だねえ、雲なんてどこから出てくるんだろう。ねえ、西の空は青白くて光ってよく晴れてるだろう。そして風がどんどん空を吹いてるだろう。それだのいつまでたっても雲がなくならないじゃないか。」

「いいや、あすこから雲が湧いてくるんだよ。そら、あすこに小さな小さな雲きれが出たろう。きっと大きくなるよ。」

「ああ、本当にそうだね、大きくなったねえ。もう兎ぐらいある。」

「どんどん駆けてくる。早い早い、大きくなった、白熊のようだ。」

「またお日さんへかかる。暗くなるぜ、きれいだねえ。ああきれい。雲のへりがまるで虹で飾ったようだ。」

西の方の遠くの空でさっきまで一生懸命啼いていたひばりがこのとき風に流されて羽を変にかしげながら二人のそばに降りてきたのでした。

「今日は、風があっけありませんね。」

「おや、ひばりさん、いらっしやい。今日なんか高いところは風が強いでしょね。」

「ええ、ひどい風ですよ。大きく口を開くと風が僕の体をまるで麦酒瓶のようにボウと鳴らしていくくらいですからね。わめくも歌うも容易のこっちゃありませんよ。」

「そうでしょうね。だけどここから見ていると本当に風はおもしろそうですよ。僕たちも一ぺん

5 【小岩井農場】岩手山の南

に開拓された農場。

12 【鶯色】とんびの羽のよう  
な焦げ茶色。

15 【から松】本州中部の高原  
地方に多い、落葉高木。

20 【まわり燈籠】内枠と外枠  
からなり、明かりの熱で内  
枠が回転するように作られ  
た燈籠。このとき外枠がス  
クリンとなって内枠に描  
かれた影絵をくるくると映  
し出すしくみになってい  
る。

15 【かしげる】傾ける。斜め  
に曲げる。

飛んでみたいなあ。」

「飛べるとこじゃない。もう二か月お待ちなさい。いやでも飛ばなくちゃなりません。」

それから二か月経てた。私は御明神へ行く途中もう一べんそこへ寄ったのでした。

丘はすっかり緑でほたるかずらの花が子供の青い瞳のよう、小岩井の野原には牧草や燕麦が  
きんきん光っておりました。風はもう南から吹いていました。

春の二つのうずのしゅげの花はすっかりふさふさした銀毛の房に変わっていました。野原のポ  
プラの錫色の葉をちらちら翻し麓の草が青い黄金の輝きをあげますとその二つのうずのしゅ  
げの銀毛の房はぶるぶる震えて今にも飛び立ちそうでした。

そしてひばりが低く丘の上を飛んでやってきたのでした。

「こんにちは。いいお天気です。どうです。もう飛ぶばかりでしょう。」

「ええ、もう僕たち遠いところへ行きますよ。どの風が僕たちを連れていくかさっきから見ている  
んです。」

「どうです。飛んでいくのはいやですか。」

「なんともありません。僕たちの仕事はもう済んだんです。」

「怖ありませんか。」

「いいえ、飛んできてどこへ行っちゃって野原はお日さんの光でいっぱいですよ。僕たちばらばら  
になろうたって、どこかのたまり水の上に落ちようたってお日さんちゃんを見ていらっしやるん  
ですよ。」

「そうです、そうです。なんにも怖いことはありません。僕だってもういつまでこの野原にいる  
かわかりません。もし来年もいるようだったら来年は僕はここへ巣を作りますよ。」

「ええ、ありがとう。ああ、僕まるで息がせいせいする。きっと今度の風だ。ひばりさん、さよ  
なら。」

「僕も、ひばりさん、さよなら。」

「じゃ、さよなら、お大事においでなさい。」

きれいな透きとおった風がやってまいりました。まず向こうのポプラを翻し、青の燕麦に波  
をたてそれから丘の上ってきました。

うずのしゅげは光ってまるで踊るようにふらふらして叫びました。

「さよなら、ひばりさん、さよなら、みなさん。お日さん、ありがとうございました。」

そしてちょうど星が砕けて散るときのように体がばらばらになって一本ずつの銀毛は真っ白に  
光り、羽虫のように北の方へ飛んでいきました。そしてひばりは鉄砲玉のように空へ飛び上がっ  
て鋭い短い歌をほんのちょっと歌ったのでした。

私は考えます。なぜひばりはうずのしゅげの銀毛の飛んでいった北の方へ飛ばなかったか、  
まっすぐに空の方へ飛んだか。

それは確かに二つのうずのしゅげの魂が天の方へ行っちゃったからです。そしてもう追いつけなく  
なったときひばりはあの短い別れの歌を贈ったのだらうと思います。そんなら天上へ行っちゃ二つ  
の小さな魂はどうなったか、私はそれは二つの小さな変光星になったと思います。なぜなら変  
光星はあるときは黒くて天文台からも見えずあるときは蟻が言ったように赤く光って見えるから  
です。

3 【御明神】岩手県雫石町

の地名。おみようじん。

4 【ほたるかずら】山野に自  
生する植物。星形の青い花  
が咲く。

4 【燕麦】イネ科の植物。え  
んばく、オーツ麦とも呼ば  
れる。

7 【錫色】明るい銀色。錫は  
銀白色の金属。

16 【変光星】明るさの変わる  
恒星。

【著者】宮沢賢治（みやざわけんじ）

一八九六（明治二九）年—一九三三（昭和八）年  
農学者、詩人、童話作家。岩手県の生まれ。

【著書】『春と修羅』、『注文の多い料理店』など